

東亞天文協會觀測部月報

〔注意〕 今後、本會觀測部内の各課の學術的な諸報告の詳細は、成るべく花山ブレテン記す。故に部員は必ずブレテンを見られたし。

變光星課報告 (16)

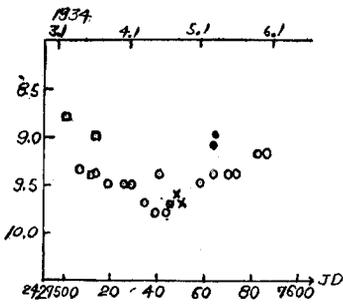
小山 秋雄

5 月中 觀測數

星名	今津	木邊	加藤	沓掛	木下	星名	今津	木邊	加藤	沓掛	木下
U Boo	—	—	—	—	5	V Hya	1	—	6	—	—
RV Cnc	—	2	—	—	—	R Leo	2	—	—	6	—
T Cen	—	—	—	2	—	R LMi	—	5	—	—	—
R Cor	7	—	10	—	5	V Oph	1	—	—	—	—
V Cor	—	—	—	—	5	RS Oph	—	1	—	—	—
U Her	—	—	—	—	5	R Vir	4	—	—	2	—
R Hya	4	—	11	2	3	合計	19	8	27	12	23

詳細は花山ブレテンに發表する。先月に比し觀測が夫々の星に集中される様になつたのは喜ばしい事であるが、依然 SS Cygni 型の如きものの少ないのは残念である。▲新に報告させられた木下謙氏の使用された器械は、10 糎屈折赤道儀 (32×) 及ガリレオ双眼鏡 (3×) である。▲今津氏は從來双眼鏡を使はれてゐたが、5月より中村85糎反射經緯儀をも使はれる事となつた。

しし座 R 星の極小 別圖の光度曲線 (縦軸に光度、横軸に日) は西村 (3個)、沓掛 (16個)、金田 (2個)、今津 (2個) の諸氏の目測より得たもので、極小期は略



JD 2427542即ち4月15日, 極小光度は9.7等と決定できる. これは伊國 ロレタの昨年11月1日の觀測した極大光度時より164日を經過してゐるが, 平均は極大後177日にして極小が起るのであるから, 13日も早いわけである.

黄道光課月報

幹事 淺野英之助

今回は南米ブラジルの觀測概況を載せる筈であつたが, 尙取調べ中で次の機會に譲ることとする.

黄道光——(西天) 宵の觀測は月初めより中頃まで可能である. それ以後は月のために妨げられる. 東天の銀河は天頂に迫つてくるが, 未だ全く妨げとはならないであらう. 黄道光はそれ自身甚だ淡いため觀測困難ではあらうが, 本月はその頂點の偏り, 及び中心線の傾き等特に老練家の觀測を切望する. 比較銀河は C, 即ち γ, β Cygni の間に擴がつてゐる銀河である.

(東天)——曉の觀測は10日頃より25日頃まで可能である. 銀河は東方地平線上に漸く姿を現し黄道光の底部を横ぎる. 比較銀河は LC, 即ち Lacerta 及び Cepheus 附近の銀河である. 秋の東天の見え初めであつて本年は果して何日にそのトップが切られるであらうか. 今數年來の記録を拾つてみれば

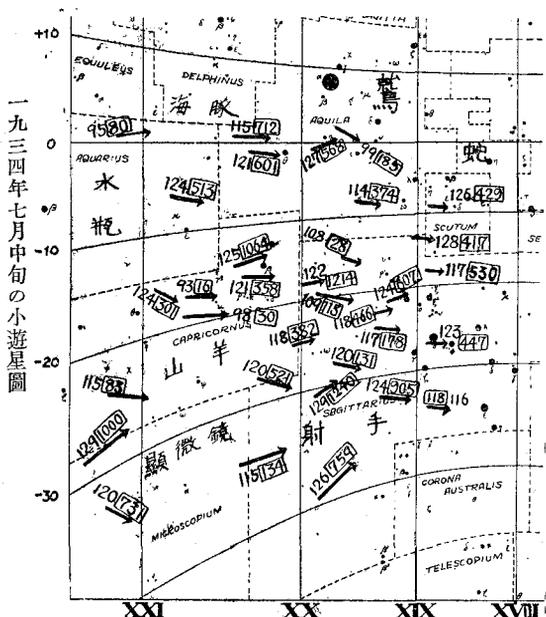
1922年 8月 25日	三澤氏	1931年 7月 15日	下保氏
1923年 8月 16日	榎原氏*	1932年 8月 2日	荒木氏
1927年 9月 1日	龜井氏	1933年 7月 21日	本田氏
1928年 9月 15日	ク		
1929年 9月 15日	ク		
1930年 7月 27日	荒木氏		

*故中村先生の記録整理中に小山先生によつて發見されたもの

以上の如くである.

對日照——中旬以後には反日點も漸く銀河を離れてその東方射手座より山羊座に移り, 淡い乍らにも見えるのであらうが, 不幸下旬は全く月に妨げられて殆んど觀測不可能であらう.

寫 眞 課



一九三四年七月中旬の小遊星圖

注意 上圖は本年7月中にほど對衝の位置に来る小遊星の7月中旬より7月下旬に、かけての位置である。矢は小遊星の運動方向を示す。括弧の中にある数字は、小遊星の番號を表し、他は衝に於ける其光度を表す。例へば、→128(417)とは、417番の小遊星にて、衝に於ける其光度は12.8等との意である。7月の小遊星觀測は、其位置銀河

中には入るので、星の檢出に骨が折れる。小遊星を線に撮影して、幾分其困難を脱れ得。

小遊星と彗星課報告

ジャックソン (Jackson) 天體 天界先月號に於いて、1934a 彗星として報告した Jackson 星が其後の報告によれば、彗星ではなく、判然とした小遊星である事が知られたことを記した。其軌道要素は下記の通りである。

Epoch 1934年3月24.0日, 萬國時	(330) Adalberta
M = 2.41208	—
$\omega = 194.^\circ 92839$	—
$\Omega = 358.03676$	359.236 } (1925.0)
$i = 24.60834$	
$\varphi = 11.58789$	—
$\mu = 11.281872$	0.3263
$a = 2.303750$	2.0893
$m_0 = 13.5$	13.5
$g = 11.1$	11.7

天體の乾板上の像は、最初のもはボンヤリした小彗星狀に撮つて居るが、最近の乾板には、鋭い像を結んで居る。此の星は1934FGと呼ばれるが、1892年發見後今日まで行方不明となつてゐる第330號小遊星 Adalberta と同一のものかと思はれる。

此れによつて、今年はまだ一個も彗星が發見されてない事になる。(柴田記)

Jeffers星 天文同盟回報480によれば、リク天文臺のジェファス氏は、次の位置に、一つの天體を發見した。

萬國時	赤經	赤緯	
1934年 5月 9.日 2311	$13^{\text{h}} 8^{\text{m}} 21.8^{\text{s}} 3$	$-4^{\circ} 6' 26''$	(但、分點は 1900.0年)
日々運動は、	赤經 $- 0^{\text{m}} 21^{\text{s}}$	赤緯 $+ 1' 20''$	

天體の光度は19等、形狀に關しては 何等の報告はない。彗星か小遊星か未定である。(柴田)

南米モンテビデオ天文臺の Osten 博士は次の小遊星の觀測を希望して居る。

11, 29, 178, 447, 481 505, 583, 965, 1254, (此等は小遊星の番號である)

此の中本年 7月に衝になるものは、178, 447 の2個である。上圖によつて觀測を希望する。

流星課月例報告

課長 小 楨 孝 二 郎

一九三三年度の最後の觀測報告である。十一月の獅子座流星觀測のあとをうけて觀測數も可成り多い。新進宇野、和田兩君の活躍も著しい。大部分は双子座流星群を目的としたものであるのは、同流星群の出現期間が月明の影響なく好條件にめぐまれた事によるものであらう。

流星群の出現狀況

双子座流星群の出現状態は、この二三年來可成り活氣を呈してゐるものであるが、本年の出現も著しい方であらう。觀測は10日より18日までに亙つて殆んど連日の觀測が行はれてゐる。各觀測者とも13—14日の夜半後に最も多くの流星をみとめてゐる。就中同夜に於ける八幡君の觀測流星數が最多で一時間平均30個を記録してゐられる。翌14—15日の觀測も可成りの數であるが、其の後の觀測中にはこの群に屬するものはみとめられてゐない。

稻垣君は同時期に出現する双子座 β 流星群を14日拂曉に於て若干見られてゐるが、あまり顯著ではなかつた。其他には特記すべき流星群の出現はなかつた様である。

詳細は花山ブレテン第282號を讀まれたし。

遊星面課報告

概況 上旬は相當好天氣であつたが、デフイニションが悪く、中下旬に到るに従ひ氣流状態は悪化したが、先づ例年通り、條件はよい方であつた。

丁度木星が好位置にあつて、今月は相當スケッチも集まつた。金星はよほど小さくなつたのと、朝であるため成績が擧つて居ない。今報告を受けて居る人が10糎級と25糎級に飛び離れて居るが、願くば15糎級で兩者をつないで呉れる人のスケッチを是非多く望む。

金星 沓掛氏が數日と伊達氏が2枚、木邊君が1枚寫生して居る。位置も充分ではなく、よほど小さく、詳かくは見えない。伊達、木邊兩氏は白斑？を見てあるが、何れも自信を持つた發表ではないため、決して斷言出来ない、又伊達氏が欠ヶ際を注意して、やや不同？と云ふスケッチを送られたが、何か少々變つた事でもあつたかも知れぬと思つて居る。

木星 送付のスケッチは松本氏2枚、伊達氏1枚、中野氏2枚(4月)宮原氏2枚、鳥羽の某氏(未整理中に付き……十數枚—先年末より)等で、幹事のスケッチも十數枚を得て居る。

極地方には大して異狀なし。南の方が北より稍黒く現在は見えて居る(木邊)。北 50° — 30° 位の所に三本位一寸目に止る事もあり、特に經度 30° — 50° 位の所(大赤斑より稍遅れて)は一寸大きく黒い、最近これが目に立つて來た様に思はれる。

北 30° — 20° 邊、北熱帶の暗帯に到る所は現在では全體として一番白い様に見受ける。北熱帶の暗條は黒く、數年前より細くなつた様だが、三月獨乙より暗點發見の報道が來たが、報道到着時分には既に見失つたのか、認めなかつた。北側は少し突出した様な所もある。割に平凡で、赤道に近い部分の方に色々變つた事が目に止まる。然しこの帯は小口径では殆んど直條近く、あ

まり見甲斐もない。但、この帯から赤道を横ぎつて南熱帯にまで淡い模様か煙の如くに見えて居るのが、大部分の人が見て居る。これは比較的新しい？（猶、木星の熱帯温帯等の名は地球に準じて名付けた事は御承知と思ふが一應御断申上げる）

赤道帯はこの頃は稍薄暗く、何かある様だが見分け得る程現在明瞭なものを見て居ない。白斑はこの附近が常に目立つた程でもないものが見えて居る。

南熱帯…ここには大赤斑が控え、現在も木星面上最も興味のある部分で、明暗、黒白斑等數多が並列し、出現、消失、變位、盛衰等々を見せて居る。

大赤斑(今は赤くは目立たぬ故初めて見る方に御注意)直後は一複雑してスケッチが充分撮れない。數多の白斑と其れに附隨した明暗が見えて居る。(寫眞参考、寫眞に撮つたりして大分原圖より亂れ、又帯の大き位置等も正確に記入したのではない爲不充分だが—25cm 220×にて木邊描寫、1934年5月26日23^h 35^mシ1イング6) 100°位まで白斑が並び、赤斑の反對側は比較的淋しい。又それを過ると二條に分れた様に見え、數十度進むと合一して又90°位進むと細い線で分れて大赤斑が出て来る。15cm級なれば以上の事位は樂に(氣流がよいとして)見られると思ふ。南熱帯よりやや南の細帯は黒いのでよく小口径にも目立つが、赤斑直後で現在は切れて居る。(この事は前號を見られたし)この細帯にも「コブ」が多くあり又この帯と暗黒帯の間には白斑や黒い橋の様なものも多く、むしろ同一帯とした方がよい位關係が深そうである。

その南に少し白い帯があつて現在はここは非常に白く見えて居る。そして徐々に二本の細帯が見えて南極地方で移つて居るが北より暗いだけ何かある様にも見向ける。

今日の木星の概況をスケッチから見ると大體この様に見受けた。なほ御送付のスケッチに對して何時何分の位置で書いたか明記して戴きたい。でない木星は自轉が早く、スケッチに30分以上も時間の費してあるものは、スケッチの時刻が分らず、又南から畫いて北暗帯なども書いて往々「ズレ」たものが出来てしまふ事にも注意しなければならない。

猶ほ四月下旬米國で赤道帯に白斑が出て非常に大きいと報道されたが、急報にあつた如くその三日後に見た時には例の白斑の行列した複雑なものが見えて居たが、近頃見え出したものでもなく、その時より二時間後れて孤立の白斑が見えて居たが、別に騒がねばならぬ位ではなく、木星面上なれば珍らしくないと自分は考へた。これは一日に見て、十日位で消失したらしい。兎角油断は少しも出来ないが、去年の土星の白斑以來、遊星面上の spot に少し外國專人間では神衰過敏になり過ぎては居ないかと思つて居る。(幹事)

太陽課 黑點相對數報告 (1934年六月)

觀測者(觀測地)	松本(臺灣臺中高女)	山田(山口縣小郡町)	日野(愛媛縣新居郡)	改發(神戸市須磨區)	荻部(神戸市灘區)	伊達(兵庫縣雲雀丘)	井澤(大坂市岡中學)	北村(大坂市外布施)	前田(京都市下京區)	龜井(花山天文臺)	木邊(滋賀縣中里村)	三澤(長野縣上諏訪)	香掛(長野縣青木村)	清水(静岡縣島田町)	森久保(橫濱市中區)	淺居(橫濱保土谷區)	水谷(東京市本郷區)	稻垣(東京市芝區)	山根(東京市澁谷區)	千葉(岩手縣水澤町)	下保(札幌市豐平町)
鏡徑耗	50	75	98	150	75	36	110	50	70	55	73	73	102	100	35	27	38	75	44	50	58
倍率	40	48	69	68	77	55	92	62	40	64	60	83	75	73	50	50	50	30	43	50	44
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	雨	0	曇	0	欠	0	0	0
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	0	欠	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	0	欠	0	0	0
4	11	0	0	欠	14	0	14	0	0	0	11	11	11	0	0	0	0	12	14	0	0
5	旅	14	欠	欠	19	18	19	13	16	18	欠	17	16	22	16	13	13	15	17	22	15
6	曇	欠	欠	欠	25	25	23	15	20	20	23	25	29	25	18	15	18	17	21	20	16
7	雨	欠	欠	欠	23	22	20	13	18	19	19	34	30	46	14	12	12	15	19	17	17
8	雨	欠	欠	欠	24	23	17	25	28	28	35	30	30	33	17	13	14	16	27	16	15
9	29	欠	欠	欠	35	33	0	0	曇	曇	16	14	曇	13	12	12	14	29	29	曇	14
10	30	雨	雨	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	雨	雨	雨	雨	雨	雨	曇	欠	曇	曇	13
11	13	曇	雨	曇	曇	曇	0	曇	曇	雨	雨	雨	雨	0	0	曇	曇	欠	曇	雨	0
12	12	曇	雨	曇	曇	曇	雨	曇	曇	雨	雨	雨	雨	0	0	曇	曇	欠	曇	雨	13
13	13	曇	雨	曇	曇	曇	雨	曇	曇	雨	雨	雨	雨	0	0	曇	曇	欠	曇	雨	0
14	18	16	19	17	18	18	17	14	17	15	15	15	14	17	16	14	15	14	17	雨	19
15	25	19	22	22	18	18	16	18	18	17	17	18	23	25	17	13	20	17	17	曇	19
16	22	28	欠	欠	22	22	16	20	18	20	20	23	26	25	18	14	20	17	22	23	19
17	38	欠	欠	欠	42	21	27	16	31	21	21	40	52	40	31	14	32	18	25	34	20
18	35	曇	曇	曇	38	30	30	16	31	32	43	38	53	53	曇	曇	30	欠	34	35	33
19	35	曇	曇	曇	36	34	35	29	32	35	43	48	64	48	曇	曇	34	欠	30	37	33
20	40	休	曇	曇	34	32	曇	28	30	34	33	41	53	40	45	欠	28	37	41	38	38
21	30	測	曇	曇	31	28	欠	曇	雨	雨	雨	42	41	雨	曇	曇	曇	雨	雨	曇	25
22	31	測	欠	欠	45	30	24	26	26	27	30	42	41	曇	曇	曇	曇	雨	雨	曇	25
23	26	測	欠	欠	39	37	37	24	25	36	39	36	39	26	曇	曇	曇	雨	雨	曇	26
24	26	測	欠	欠	27	32	24	25	29	25	28	40	39	25	曇	曇	曇	旅	旅	曇	24
25	24	測	欠	欠	23	32	24	25	29	25	27	26	35	25	曇	曇	曇	旅	旅	曇	24
26	11	測	欠	欠	25	24	26	22	23	22	22	26	29	25	曇	曇	曇	旅	旅	曇	22
27	12	測	欠	欠	12	11	欠	欠	欠	欠	欠	23	12	13	曇	曇	曇	旅	旅	曇	11
28	11	測	欠	欠	12	11	欠	欠	欠	欠	欠	11	11	11	曇	曇	曇	旅	旅	曇	12
29	11	測	欠	欠	0	12	11	11	11	11	0	11	11	0	曇	曇	曇	旅	旅	曇	0
30	0	測	欠	欠	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	曇	曇	旅	旅	曇	0
31	0	測	欠	欠	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	曇	曇	曇	旅	旅	曇	0
平均	19	16	17	20	18	16	14	17	16	17	21	26	21	14	10	14	13	20	17	14	
日數	22	16	17	26	27	27	24	26	25	28	28	25	24	23	16	18	19	24	21	24	

●今月の黒點活動は目覺しいものであつた。極小期を脱した直後の黒點活動の特長は如何と云ふ意氣で愈々觀測を勵んで頂きたい。●前號本欄の相對數の計算式に誤植あり、[群の數]×10+[黒點總數]と訂正す。●黒點に關する花山ブレテンは No. 272, No. 274, No. 276, No. 277, No. 281. であるから精讀されたい。